様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３４４

研究課題名（和文）＜免疫の詩学＞の構築ー聖パトリックの煉獄巡礼地をモデルにして

研究課題名（英文）Construction of Poetics of Immunity : St. Patrick' Purgatory as a Model

研究代表者
木原　誠（Kihara, Makoto）

佐賀大学・教育学部・教授

研究者番号：００２９５０３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：身体における自己の主体は脳にではなく、臓器機能の役を免れ身体の周縁を巡る漂白の細胞、免疫(インミュニティ)に宿る。ここに身体における縁と無縁の逆説の関係がある。本研究の目的はこの免疫学の命題を詩学に導入し、文化の主体のありかを、コミュニティ内部 から排除され、周縁 に置かれた「インミュニティ(免疫)=アジール」にあると措定し、マクロ・中央集権・ リアリズムの世 界観をミクロ・周縁・虚構=無視・排除されたものの方から逆説・異化し、新 しい文化理論を構築することであった。対象地域はオクシデントの表象を負い、ヨーロッパ独自の死生観＝煉獄の概念が誕生 したアイルランド・聖パトリックの煉獄である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of my study was to show a new idea on Cultural Studies from the perspective of immunology(Poetics of Immunity) on the hypothesis of the core of culture being paradoxically in immunity excluded from community (antonym of community); it comes to be the familiar world viewed from the macrocosmic, centralized and realistic aspects reverted to the disfamiliar one from the microcosmic, marginalized and fictional. The key is to be found in the cultural functions of asylum(the same etymological meaning of immunity). The subject area of the East (or Orient) was focused on Toukeiji in Kamakura, the earliest refuge monastery (asylum) in Japan and the West on Lough Darg’s cloister (known as the birth place of purgatorial myth) in Donegal Ireland, the representative of Occident (the most western point of Europe).

研究分野：アイルランド文化

キーワード：免疫　オクシデント　記憶　徴候　無縁　アジール　煉獄　水辺の巡礼

１．研究開始当初の背景

人文学における風景であった「文化」が前景化され、「文化学」という 一つの組織的学問として誕生したのは一九六〇年代である。この時期は医学における免疫学の発生と期を一にしているが、医学においては免疫学の台頭は一つのコペルニクス的な転換をもたらした。近代医学は脳を身体の中心=主体のありかと措定した上で、身体臓器をパーツごとに細分化し、各臓器の関係性を検証する「臓器主義」を前提としていた。だが、免疫学はこの前提を覆し、 身体の主体のありかを臓器機能の役を免れ、身体の周縁を巡る<漂泊者>、免疫という現象=作用に求め、免疫(=時空を流動する主体)との関係性において身体全体を捉え直す新しい認識=現象学へと医学上の転換を迫ったからだ。だが、文化学はいまだこの認識の転換を知らない。確かに、 今日の文化学は、国民・国家という概念が「幻=表象にすぎない」と捉えることで、実体(国民・ 国家)の主体が虚構(表象)にあることを暗に認めてはいる。ただし、その幻を生み出す主体は何かと問われるとき、文化相対主義の名のもとに主体の問題を棚上げにするか、さもなければフーコーの 排除理論や「オリエンタリズム批評」に窺われるように、主体を「パノプティコン」の構築者としての社会上位(帝国主義)=頭部・監視機構に求めるか、そのいずれかたの視点を取るからである。後者の場合、カルロ・ギンズブルク(『チーズとうじ虫』)が指摘するように、「沈黙する絶対的な他者的存在」という言説のもとで上位による下位の排除システムを追究する余り、逆に本来沈黙などしていな かった下位・個・周縁者に対してまでも沈黙を強いるという皮肉な結果さえ招いている。

このように排除理論には、頭脳作用と社会・文化作用の間に平行関係があるというパラダイム(前提)が潜んでいる。その点では、この理論と一線を画す構造主義も同様である。文化構造(神話構造)は言 語構造=脳の文法に平行するという前提のもとで、言語モデルによって文化現象の解明を試みているからである。だが、身体としての文化の文法が脳の文法に従属・平行するという根拠は実のところどこにもないのである。文化の主体の座を社会の頭部や内部システム、あるいは頭脳の言語システムにみる閉ざされた文化学理論の最大の死角がここにある。すなわち、互いに接触し合う有機体としての様々な文化が交流・ 衝突した場合に必然的に起こる相互異化作用の問題、換言すれば、脳の文法を異化する<身体の文法>としての文化免疫作用の主体的な働きの問題である。

２．研究の目的

身体コミュニティの主体のありかは脳にではなく、免疫(インミュニティ)にある。身体全体の記憶を宿すことで自己と非自己を識別・認識する作用は免疫にあり、免疫は頭部にはないため、識別・拒絶されるのはむしろ脳の方だからである (多田富雄著『免疫の意味論』参照)。では、どうして免疫は身体コミュニティの主体者になりえるのか。 それは免疫があらゆる身体コミュニティの臓器から無縁であり、つまり「(臓器機能の)役を免れ(=排除され)」、身体の内と外との境界線=周縁を巡る身体の漂泊者(ディアスポラ)だからである。「役 /疫の共有」という語源をもつコミュニティの主体がその内部にではなく、「役/疫(共有から)の 免除=排除」を意味する(周縁・ミクロの)インミュニティに宿るというこの生物学的真実は身体における一つの逆説であるが、本研究はこの免疫作用と文化作用との間に平行関係がみられ点に注目する。免疫と同じ意味をもつ文化学用語、「アジール」の作用=「無縁の原理」(網野善彦)は、 免疫作用と酷似する働きを示しているからである。この点については、すでに科研費研究(挑戦的萌芽

研究:<文化免疫学>からの挑戦、及び<文化地霊学>からの挑戦)を通じてある程度は検証済みである。そこで得た知見を踏まえて本研究では、免疫の詩学の探究の最大の意義を従来の文化・文学理論の認識法を異化し逆説化する次のような認識のあり方に求めた。

身体の文法としての免疫の認識法は頭脳＝「眼ざし(視覚/頭脳)の認識法」と根本的に対立する「面(おも)ざしの認識法」である(坂部恵『仮面の解釈学』によれば能の「面」には表と裏、主体と客体という二項対立の概念がそもそも存在していない)。すなわち、一方は自己認識を最大の盲点—自己の瞳に映らないものは自己の瞳—とする主体不在による固定(空間認識)型の客観的な他者認識 作用である。他方は主体の働きを前提とする移動型の主観(省察)と客観(観察)をたえず一致させていく自他認識作用である(免疫は自己の面を他者の面と照らし合わせることでのみ自他を認識する)。

他者との交流・衝突によって絶えず自己記憶(主体)を異化し生成させていく「面（おも）ざしの認識法」 =免疫の文法に映る動的な「世界」は、従来の「眼ざしの認識法」に映る静的で閉じられた「世 界」を逆説化するが、その文法の根本は縁を無縁(コミュニティをインミュニュティ/アジール)の縁 で結ぶ「無縁の原理」に求められる。本研究はこの無縁の原理が現在でも豊かに働く磁場として ヨーロッパ文化圏の中からある地点に注目し、それを一つのモデルとして提示することによって、「免疫の詩学」を構築することを目的とした。その地点が(精神史的意味において)免疫 T 細胞の母胎にして教育現場である「胸部胸腺」に相当すると措定したからである(免疫学の誕生は胸部胸腺の発見による)。具体的に対象とした地域（地点）とは、アイルランド北西部ドニゴール州のダーグ湖の小島にある聖パトリックの煉獄巡礼地(ステーショ ン・アイランド)である。ここは、ヨーロッパ文化を形成するうえで極めて重要な概念(死生観)、 「煉獄」が12世紀後半発生した地点であり(ジャック・ル・ゴフ『煉獄の誕生』)、しかもその生成を現在も続けているからである(ヴィクター・ターナー『キリスト教と巡礼のイメージ』)。文学的にみても、その影響は計り知れないものがある。ダンテの「煉獄篇」(ル・ゴフ)、シェイクスピアの『ハムレット』(スティーブン・グリーンブラット『煉獄のハムレット』の指摘)、ラブレーの『ガルガンチュア物語』(バフチン『ラブレーの作品』の指摘)、W. B. イェイツの多くの詩、シェイマス・ヒーニーの『ステー ション・アイランド』にその影響が顕著にみられる。上述したことを踏まえて、本研究では眼ざ しの認識法による実証としての歴史では捉えられない潜在性(可能性)としての歴史の<影/響> を面ざしの認識法により解明することで、免疫の詩学の方法を具体的に開示することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は「免疫の詩学」の理論構築を前提とした。幸い、そのために最低限必要とされる方法の基礎理論は、基礎研究(C)代表木原誠(研究課題名「国際文化学の構築—<衝 突の関係学>の視点から」)とその援助を受けて刊行された木原誠編著他『歴史と虚構(イストワール)のなかの<ヨーロッパ>—国際文化学のドラマツルギー』、挑戦的萌芽研究(個人)(研究題 目「<文化免疫学>からの挑戦」とその援助を受けて刊行された木原誠編著他『周縁学』、及び挑 戦的萌芽研究(個人)(研究題目「<文化地霊学>からの挑戦」を通じてすでにある程度構築していた。本研究はこの成果を踏まえ、さらにそれを本研究の目的である「免疫の詩学」 創成のための基礎理論への適用可能性を模索することから始めることにした。むろん、本研究は未踏の学の創成を目指していたため、従来の研究の成果をそのまま適用

することはできず、新しい方法を独自に模索していく必要に迫られた。そこで、この方法の考案にあたって以下の点に留意することにした。すなわち科学としての免疫学と詩学あるいは表象学とが隣接する接線に注視することで、科学と人文学の知を融合する新しい方法を採用したのである。かつて「科学」は「シエンツァ」と呼ばれ、シエンツァは本来「科学」と「人文学」の 「総合知」を意味していたことから、この方法は科学の原点に根ざす古くて新しい方法であると考えたからである。方法のモデルとして考慮した先行研究は、科学の分野においては多田富雄が提示する免疫学研究の成果に基づく新しい医学の視座であり、他方、 人文学においては網野善彦、阿部謹也等のアジール/無縁研究、カルロ・ギンズブルクの歴史 研究とその視座、および思想家 J・デリダの後期における免疫学の視座(彼は免疫学の思想への適用を模索する途上で死去)である。本研究は、上述した先行研究のさらなる読み込み、分析等を通じて、それらを融合させた新しい方法を考案し、その適用範囲を聖パトリックの煉獄巡礼地に求め考察を深めていった。これをさらに具体的に記せば以下のようになる。

本研究では、医学・精神病理学の三つの概念、免疫学・タブー・徴候と詩学あるいは表象学との隣接線=しるしづけ作用に注目することで、科学と人文学の知を融合する新しい方法を考案した。その前提には周縁の原理としての以下の命題があった。

命題: 身体コミュニティ、人間の心理、文化コミュニティの主体は周縁に宿り、その際主体はしるしづけを行う。そのしるしは<記憶=印>であるとともに<徴>である (周縁のしるしづけ作用)。身体コミュニティのしるしづけ作用に関しては、免疫作用から検証を行っていった 文化コミュニティに関しては<文化免疫作用=無縁の原理>により検証することができた。人間の心理に関しては、フロイト派のタブー原理で用いられた方法を用いて行っていった。すなわち、自己性の核心は自己の負性=タブーに求められることから、人は自己性の核心をこそ隠蔽・排除・周縁化する。だが、同時にタブーは自己性の核心であるため人はそれを隠しつつも開示し、密かに深層心理においてしるしづけを行なうことにより自己性を保とうとする。文化コミュニティと心理におけるしるしづけ作用の平行については、すでにルネ・ジラールが『聖なるものと暴力』、フロイトが『トーテムとタブー』において検証を行なっているが、それを死の逆説の方から捉え直そうとしたのがビンズワンガーである。以上の理解を念頭にさらに本研究では、そのプロセスにおいて以下の方法を採用した。

一次資料に基づく実証的な歴史記録を丹念に読み、分析していくと同時に、他方において、その事実としての歴史=記録が文学的想像力(虚構作用)の介入によって異化され、一つの表象=文化記憶となっていく過程を分析、すなわち<記録の記憶化への過程>を分析していく方法を取った。すなわち歴史資料と文学作品、伝承説話(中世都市伝説としての煉獄説話)を平行させて精読しつつ、虚構(表象)作用の介入のプロセスを分析していくための方法を用いた。この方法はアナール学派に極めて接近する方法であるため、 この学派の重鎮であるジャック・ル・ゴフの研究方法を視野に入れた(彼は、本研究 の対象地域の一つ、ドニゴールに伝わる煉獄説話をその著書、『煉獄の誕生』)において考察していたこともあり、この点からも彼による研究の方法は大いに参考になった)。ただし、伝承資 料の収集に関しては、現地調査と同時に文学作品から逆に当時の伝承説話を摘出するという方法を用いた。

４．研究成果

１）西洋は「ヨーロッパ」というハレの名前の裏に「オクシデント」=「日没/没落=西」とい

う影の名を隠しもっている。この名は生の表象「オリエント」(日の出=東)に対し死の表象であるためヨーロッパの精神はオリエントから表象奪取を企むことになった—「今や日は西から昇り東に沈むことになった」(教父クレメンス)。他方、負の表象を帯びたこの名を極西アイルランドの極西・ドニゴールの洞窟(ロッコ・ダーグ)に封印し、その地帯を 生前の罪を贖う「煉獄」と印づけることで、自己の名を隠蔽・タブー化していった。かくして煉獄の印はカトリック (煉獄公認)にとって逆説的聖の表象となる一方、プロテスタント(煉獄否認)にとって悪の表象と化していくことになった。この精神史の印はそのまま国土(アイルランドと英国)を二分する紛争の種/徴=国境となっていったが、この政治と精神の激しい対立はここが今も文化免疫作用が働く現場であることを逆説的に証するものである。シェイクスピア（『ハムレット』）、W. B. イェイツ（詩と戯曲）、ヒーニー（『ステーション・アイランド』など）はこの理解を前提にして各々作品を描いていたことが作品分析を通して確認された。

２）聖パトリックの煉獄巡礼地はアジール/免疫の作用である無縁の原理が今も活発に働く<現場>である。このことは、聖パトリックを「ステーション」の開闢者とするアイルランドの「緑の修道僧」たちの精神が証するものである。彼によってその精神の根本である「緑の殉教」の伝統は生まれたからである—彼らはこの世の旅路を煉獄巡礼(エクトライ)とみなし、自己を未踏の地に追放(エグザイル)することで、この世との縁を断ち切り、無縁者になりその身を供すことを求めた。通常の歴史の観点からみれば、彼らの行動がヨーロッパ史に与えた影響は些細なものと映るだろう。だが、免疫の詩学の観点、すなわち縁を無縁の縁で結ぶ「緑の殉教者」たちによる<記憶と徴候のしるし—免疫の作用は記憶(過去)と徴候(未来)のしるしに顕れる—>から捉え直すことで、その影響の大きさがいかなるものであるか理解された。すなわち歴史の闇に埋もれたこのもう一つの歴史の影響を顕在化させ、さらにそれをたんなる過去の遺産として提示するだけではなく、その背後に働く無縁の原理を読み解くことで、もう一つのヨーロッパ史（ヨーロッパの周縁史）を顕在化させ、未来を徴候する新しい学の一つのモデルを提示することができたこと、ここに本研究の最大の成果があったと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

1 佐賀大学教育学部研究論文集第2集第1号 (2017) 木原誠「ベン・ブルベンの麓」に宿る面影 古代アイルランド修道僧ーアイルランド/巡礼的思考(覚書 2) pp.51-128

2 佐賀大学教育学部研究論文集第1集第1号（2016）木原誠 W. B. イェイツと聖パトリックの面影-アイルランド/巡礼的思考(覚書1)pp.77-105 佐賀大学教育学部研究論文集第2集第1号

3 佐賀大学文化教育学部研究論文集第20集第1号（2015） 木原誠 煉獄の鎌倉-「免疫の詩学」結びと展開 pp.85-105

〔学会発表〕（計 1 件）

日本イェイツ協会（西南大学 2015） 木原誠 「イニスフリー湖島」に描かれた<透かし絵>

〔図書〕（計 1 件）

『煉獄のアイルランド—免疫の詩学/記憶と徴候の地点』 木原誠 （彩流社 2015）610頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
木原 誠（Kihara makoto）佐賀大学・教育学部・教授

研究者番号：00295031

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）